Pippa Passes

試訳と註 (I)

松 浦 美智子

R. Browning の作品，*Pippa Passes* を訳出するにあたり，使用したテキストと作品について，まず説明したい。

1. テキスト

1) 1841年初版（Browning 29歳)。8つのパンフレット（タイトルは，*Bells and Pomegranates*）の中で，1番目に出版された。16ページで，各ページは縦2列，紙のカバーであった。

2) 1849年再版との間に Manuscript（註では MS に統一した）があり，特に，Introduction が広範囲に渡り，修正された。

3) 初版から全部で5回改訂されている。(1849，1863，1868，1888，1889年）48年間に渡る。

4) 論文中のテキストは，1889年版によった。様々な意見もあろうが、Browning が直接手を入れた最終版であり、詩人の思想的な，又技巧上の変遷が最も良く表われている点で，邦訳には最適と考えられる。使用したのは，*The Complete Works of Robert Browning With Variant Readings & Annotations*, Vol. Ⅲ（Ohio University Press, 1971）

2. 作 品

1) 1839年5月26日（*Sordello* の完成を Macready に告げた）と，1841年4月（出版時）との間に書かれた。

2) 主人公 Pippa は，Felipe，又は Philip の女性形の Felippa の指小形。イエスの弟子のピリポ（Philip）は，福音をスキタイ（Scythia）に

伝えた人で，美術上では，十字架をいただく巡礼者の杖を運ぶ者として描かれている。なぜピリポなのか？　聖書では，ピリポという名は，使徒（apostle）と伝道者（evangelist）と２人おり，両者とも異邦人（ユダヤ人以外）へ伝道している。使徒ピリポは，一介のガリラヤ地方出身だが，なぜかギリシア人にイエスへの仲介を頼まれ（ヨハネによる福音書12章20節-22節），又，エチオピア人の宦官にバプテスマを授けている（使徒行伝８章26節-39節）。田舎者ともいえる人物が，異国そして異質な人々に伝道した点が，Pippa のように，貧しくて身寄りのない少女の異種なる人々への大きな働きを示唆しているのではないか。詩中の Pippa は，絹織物工場で働く，14，5歳の少女である。

3）舞台は，Asolo の町（Venice から北西33マイル，北イタリア Treviso 地方，Celato 山の尾根に位置する）で，人口約4000人。古くからあり，城壁に囲まれている，Trevisan は，伝統的に Treviso に属し，その中心に置かれた地域。Browning は，1838年６月この町を初めて訪れたが，当時は，絹織物工業が盛んだった。

4）時は，北イタリアがオーストリア統治下にあることから，おそらく，皇帝 Francis Ⅰの治世の終わり頃，つまり1830年から35年あたりと思われる。

5）劇の構成は，Introduction, Part Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳで，４つの場面に登場する人々は，それぞれ，人生のきわどい危機的な状況下にいるが，Pippa の歌を聞いて自分の問題の解決を得る。

PIPPA PASSES

1841

INTRODUCTION

NEW YEAR'S DAY AT ASOLO IN THE TREVISAN

SCENE — *A large mean airy chamber. A girl,* PIPPA, *from the Silk-mills, springing out of bed.*

Day !
Faster and more fast,
O'er night's brim, day boils at last :
Boils, pure gold, o'er the cloud – cup's brim
5 Where spurting and suppressed it lay,
For not a froth–flake touched the rim
Of yonder gap in the solid gray
Of the eastern cloud, an hour away ;
But forth one wavelet, then another, curled,
10 Till the whole sunrise, not to be suppressed,
Rose, reddened, and its seething breast
Flickered in bounds, grew gold, then overflowed the world.

ピッパが通る

序

トレビザン地域，アソロでの元日

場面…みすぼらしく，風当たりの強い大きな部屋。一人の少女，絹織物工場勤めのピッパが，ベッドから飛び出して。

日！
より速く，もっと速く，
夜の縁から突き出るように，日がついに沸き立つわ。
純金となり，茶わんのような雲の縁を越えて沸き立つ日は，ほとばしり出ながらも押えられて。
なぜって、沸騰するあわの一片も，一面灰色の東の雲にあるあの割れ目

のへりに触れていなかったんですもの，一時間前には。

でも，さざなみが一つ，また一つと立ってきて，とうとう日の出が全部，もう押えられるままじゃなくて，起き上がり，赤くなったの。

その煮えたぎる胸は，矢つぎばやにゆらめいて，金色に落ち着き，それから世界にあふれ出たのよ。

(註)

1行目　Day！ 冒頭にあり，全編をおおうキーワード。「日の光」（daylight）と「一日」及び「昼」と，使われる場面で異なる。ここでは「日の光」。訳は，「日」で統一した。

3行目 "day" と "night" の対比。この作品の他の箇所では，"Day for folly, night for schooling！"（Ⅳ，ii，54行）

6行目　"a floth – flake" は，沸騰する湯からグツグツ煮えたぎる「あわ」又は「あぶく」のイメージ。煮える湯が，波のようにうねってくる様を描写している。

11行目　もともとは "Rose – reddened"（ばらのように赤くなって，1841年）だったが，MS で改められた。

Oh, Day, if I squander a wavelet of thee,
A mite of my twelve hours' treasure,
15 The least of thy gazes or glances,
(Be they grants thou art bound to or gifts above measure)
One of thy choices or one of thy chances,
(Be they tasks God imposed thee or freaks at thy pleasure)
—— My Day, if I squander such labour or leisure,
20 Then shame fall on Asolo, mischief on me！

ああ，日さん，もし私が，あなたのさざなみの一つをむだ遣いしたら，
私の12時間の宝物のわずかでも，
じっと見たりちらっと見たりする，あなたのまなざしのほんの少しでも，
（それが，あなたがしなきゃならない補助であろうと，度が過ぎる贈り物であろうと）
あなたが選び取るもの，あるいは，あなたの意のままにならぬことで

あっても，

（それが，神さまがあなたに負わせたつとめでも，あなたの勝手な気まぐれであろうと）

――私の日さん，もし私が，そうした働く時や休む時をむだ遣いするならば，

その時，アソロには恥が，私には災いが下りますように！

(註)

13行目　Day は「日の光」

19行目　My Day は，「私の一日」「一日」の中で，光はかんかん照りつけたり（labour），曇ったり（leisure）する。まるで，いたずらっ子のようだ。

Thy long blue solemn hours serenely flowing,
Whence earth, we feel, gets steady help and good ――
Thy fitful sunshine–minutes, coming, going,
As if earth turned from work in gamesome mood ――
25 All shall be mine! But thou must treat me not
As prosperous ones are treated, those who live
At hand here, and enjoy the higher lot,
In readiness to take what thou wilt give,
And free to let alone what thou refusest ;
30 For, Day, my holiday, if thou ill – usest
Me, who am only Pippa,―― old – year's sorrow,
Cast off last night, will come again to – morrow :
Whereas, if thou prove gentle, I shall borrow
Sufficient strength of thee for new – year's sorrow.
35 All other men and women that this earth
Belongs to, who all days alike possess,
Make general plenty cure particular dearth,
Get more joy one way, if another, less :
Thou art my single day, God lends to leaven
40 What were all earth else, with a feel of heaven, ――
Sole light that helps me through the year, thy sun's !

Try now ! Take Asolo's Four Happiest Ones ——
And let thy morning rain on that superb
Great haughty Ottima ; can rain disturb
45 Her Sebald's homage ? All the while thy rain
Beats fiercest on her shrub – house window – pane,
He will but press the closer, breathe more warm
Against her cheek ; how should she mind the storm ?
And, morning past, if midday shed a gloom
50 O'er Jules and Phene, —— what care bride and groom
Save for their dear selves ? 'Tis their marriage – day ;
And while they leave church and go home their way,
Hand clasping hand, within each breast would be
Sunbeams and pleasant weather spite of thee.
55 Then, for another trial, obscure thy eve
With mist, —— will Luigi and his mother grieve ——
The lady and her child, unmatched, forsooth,
She in her age, as Luigi in his youth,
For true content ? The cheerful town, warm, close
60 And safe, the sooner that thou art morose,
Receives them. And yet once again, outbreak
In storm at night on Monsignor, they make
Such stir about, —— whom they expect from Rome
To visit Asolo, his brothers' home,
65 And say here masses proper to release
A soul from pain, —— what storm dares hurt his peace ?
Calm would he pray, with his own thoughts to ward
Thy thunder off, nor want the angels' guard.
But Pippa —— just one such mischance would spoil
70 Her day that lightens the next twelvemonth's toil
At wearisome silk – winding, coil on coil !
And here I let time slip for nought !
Aha, you foolhardy sunbeam, caught
With a single splash from my ewer !
75 You that would mock the best pursuer,
Was my basin over – deep ?

One splash of water ruins you asleep,
And up, up, fleet your brilliant bits
Wheeling and counterwheeling,
80 Reeling, broken beyond healing :
Now grow together on the ceiling !
That will task your wits.
Whoever it was quenched fire first, hoped to see
Morsel after morsel flee
85 As merrily, as giddily ...
Meatime, what lights my sunbeam on,
Where settles by degrees the radiant cripple ?
Oh, is it surely blown, my martagon ?
New – blown and ruddy as St. Agnes' nipple,
90 Plump as the flesh–bunch on some Turk bird's poll !
Be sure if corals, branching 'neath the ripple
Of ocean, bud there, —— fairies watch unroll
Such turban – flowers ; I say, such lamps disperse
Thick red flame through that dusk green universe !
95 I am queen of thee, floweret !
And each fleshy blossom
Preserve I not —— (safer
Than leaves that embower it,
Or shells that embosom)
100 —— From weevil and chafer ?
Laugh through my pane ; solicit the bee ;
Gibe him, be sure ; and, in midst of thy glee,
Love thy queen, worship me !

あなたの長く青く厳粛な時は穏やかに流れ，そこから大地は，しっかりした助けと良いものを得ると私たちは感じているの ——

あなたの気まぐれな太陽の光が射す瞬間は，行ったり来たり，まるで，大地がたわむれ気分でつとめを避けているようだわ ——

すべて私のものになるのね！　でも，あなたは，私を富裕な人たちと同

じようにあしらってはいけないことよ。そうした人たちは，ここから目と鼻の先に住んでいて，人より恵まれた運命を楽しんでる。

あなたがくれるものを受け入れる準備ができているし，あなたが拒むものはほおっておく自由があるんだもの。

なぜって，日さん，私の休日さん，もしあなたが，ただのピッパでしかない私をいじめるなら —— 昨晩捨てた過ぎた年の悲しみが，また明日やって来るから。

ところが，もしあなたが優しいとわかれば，私は新年の悲しみに向かって，あなたから十分な力を借りることになるのよ。

この大地が属している私以外の男女はみんな，すべての日々を同じようにもっているから，ありふれた豊かさで，特別な不足をいやせるのよ。あるやり方では喜びを多く得るけれど，別のやり方になると喜びが半減してしまうだけ。

あなたは，私にはただ一つの日なの。神さまが，もしそうでなけりゃ，全くこの世的で空しいものを，天国の風味でふくらませるため手を差し伸べて下さる ——

この年を通して，私を助けてくれる唯一の光，それこそあなたの太陽の光だわ！

さあ，試しに，アソロで最も幸福な 4 人を取り上げてみてよ ——

あなたの朝の雨を，あの華やかな，高貴で傲慢なオッチマに注いでみて。雨は，彼女のセバルドの忠順の誓いを妨げられるの？

あなたの雨が，彼女の温室の窓ガラスをどんなに激しく打ちたたいても，その間中，彼はその分だけ近くへ寄ってゆき，彼女のほほにより暖かい息を吹きかけるだけ。どうして彼女は，嵐を気にかける必要がある ?

そして朝が過ぎ，もし真昼が，ジュウルとフィーネの上に暗い影を投げかけても —— 花嫁と花婿は，大切な自分たちのため以外に，どんな気づかいをするというの ?　結婚当日よ。

2 人が教会を去り，手をつなぎながら帰宅する間，お互いの胸の内には，あなたがどうしようと，太陽の光と上天気があるでしょうね。

じゃ，別の試みに，霧であなたの夕方を曇らせて ―― ルイジと母親は嘆くかしら ――

本当に，比べるものがないくらい仲の良いご婦人とその息子さんよ。

彼女は年老いていて，ルイジは若いけれど，そんな２人が，真の満足を嘆いたりする ？

燈火の明るい町は，暖かく，囲まれていて，安全よ。あなたが不気嫌になれば，即彼らを受け入れてくれるわ。更にもう一度，夜，嵐の中で人々は，司教さまを迎えようと騒動を起こして，大いに騒ぎ立てるのね ―― 人々は，司教さまが自分の兄弟たちの故郷であるアソロを訪れて，ここで魂を苦悩から解き放つのにふさわしいミサを棒げるため，ローマから来ることを待ち望んでる ―― どんな嵐が，彼の平和をあえて傷つけるというの ？

彼は静かに祈るでしょうね，あなたの雷をかわそうと自分で思いをめぐらして，天使の守護も欲しがらないでしょう。

でもピッパは ―― たった一度でもそんな不運があったら，一日がだいなしになってしまうわ，絹糸をひと巻きその上にひと巻きと，くたびれるこれから12カ月の苦労を軽くしてくれるこの日が ！

ここで，時間を無駄にしてしまってるわ ！　あーあ，あなた，向こうみずな太陽の光さん，私の水差しからの，たった一度の水しぶきにつかまえられるなんて ！

最も上手な追っ手でもあざ笑うだろうあなたなのに，私の洗面器が深すぎたの ？

水のひとしぶきが，あなたの眠りをだめにする。上へ，上へと，あなたの光り輝くかけらたちが飛んでゆくわ。

ぐるぐる回りながら，また逆に回りながら，よろめきつつ，戻らないほどこわれてしまって，それが今や，天井で一緒に大きくなること ！

それは，あなたの知力をすりへらしてしまうわ。だれでも，火を初めて消す人って，火の一片一片が次々と消えてゆくのを見たがっていたものよ。光と同じように，陽気に，目がくらむように消えるのをね。

その間に，私の太陽の光はどこに止まるの？　その場所で，きらきら輝くふらつく光は，しだいに落ち着くのだけれど。

ああ，私の赤い百合は，確かに風に吹かれてる？

聖アグネスの乳首のように，新たに吹かれてばら色をしていて，あるトルコの鳥の頭上にあるはだ色のふくらみのようにふっくらと！

もしさんごが，大海のさざなみの下に枝を広げていて，そこで伸び始めるなら――きっと，妖精たちが，そうした赤い百合の花が開くのを見るのよ。あのね，そうした灯りは，あの薄暗がりの緑の宇宙を通って，濃くて赤い炎を散らすの！

私はあなたの女王よ，小花さん！

それぞれのふっくらした花を

私が守らないことがあるかしらね――（花をおおう葉っぱや，花を包む苟(ほう)よりも安全に）――

ぞうむしやこがねむしから？

では，私の窓ガラスを通してお笑いなさい。みつばちを誘惑して，あざけるのよ，きっとよ。そして，喜びの最中で，あなたの女王を愛するの，私をあがめるの！

(註)

26行目　1841年では，“As happy tribes – so happy tribes!　who”であり，MSで，この形になった（但し，“the prosperous”ではあったが）。初版の「幸せな部族」という発想と，27行目の1841年版，“hand – the common, other creatures' lot –”という表現からみると，Pippaはもともと，自分以外の恵まれた人々を幸せとしながらも，「平凡な他の生き物」とは異なる自分の非凡さを感じている。

30行目　Dayは「一日」

30行―33行　MSでこの形となる（句読点の細かい変更は後年あるが）。

34行目　1841年では，“Only of thee strength against new year's sorrow : / For let thy morning scowl on”とある。“against”は「対抗して」であり，本文の“for”は「向かって」ということだ。“for”に変更された年は明確でないが，Browningは，一つの前置詞を変えることで，心情を上手に表現している。恐れず，前を向いて進む，積極的な姿勢であり，聖書に裏打ちされたものといえよう（ヘブル人への手紙12章2節）。

37行目 “general” に対して “particular”, “plenty” に対し “dearth” である。ある特別な日に天気が悪くても，他の三百何十日は晴天を楽しめるということ。“Make” は使役動詞。

39—40行　神の働き，天国と地上との関係に言及する。聖書では，“leaven”（発酵させる）と，“heaven” は切っても切り離せないもの。「パン種」は，「天国」にたとえられる（マタイによる福音書13章33節）。最初は小さいが，それを粉の中に入れてふくらますと，全体に影響を及ぼすようになる。

40行目 “else” は，もし神がこの一日を与えて下さらなければ，の意。

46行目　“shrub – house”　低木で囲まれた家か離れ。「温室」らしい。

45—48行 “All the while” 以下は，MS で加わった。

51—54行 “ ’Tis” 以下は，MS で付加。

56行目　1841では，“Madonna” という表現が使われていた。続く57行目1841年で “ – The mother and the child – unmatched ”, MS で，“Madonna” に一度されたが，“The Lady and her child, unmatched” と改められている。Browning の頭には，「聖母マリヤと御子イエス」のイメージがあったのだろう。比較できないほど親密な親子の愛は，そこに原型がある。

59—61行 “The cheerful town” 以下，“them!” までは MS で付加。

62行目 “Monsignor” カトリックで，教皇が教皇庁の高僧，高官に許す尊称。

64行目 “his brothers’ home”　Monsignor には，2人の兄がいたが亡くなっている。長兄は，実は Pippa の父である。

65行目 “masses” はカトリックの「死者のためのミサ」すなわち “requiem”

67—68行　MS で付加。

73—87行　洗面器の水に写し出された日の光が，千々に乱れて，ついには天井に反射する様を描写している。

75行目　どんなに上手に追いかけても，決してつかまるようなことはないはずなのに

81行目　千々に乱れた光は，天井に映ると一つになっている。

82行目　日の光の動きを見ていると，考える力が消費されてしまう，つまり，他に何も考えられなくなる。

85行目「これらのこわれた光がそうであるように」と考える。

88行目 “martagon” ゆりの形をした，トルコのスルタンのターバンを指すことばだが，ここでは「赤い百合」

89行目 “St. Agnes’ nipple” 3世紀のローマの殉教者。美しさで際立っていたが，キリストの妻として生きるべく，結婚を拒否して処刑された。

90行目　1841では “flesh bunch” であり，ハイフンはなし。1849年にこの形となる。「とさか」のことと思われる。又，“some Turk bird” とは，「七面鳥」のこと。

93行目　1841では “turban flowers” MS で “turban – flowers” となる。前出の「赤い百合」のこと。

94行目 “that dusk green universe” は「海底」のこと。

101—102行　みつばちを，ぞうむしやこがねむしと同様，花を犯す存在と考える。

— Worship whom else ? For am I not, this day,
105 Whate'er I please ? What shall I please today ?
My morn, noon, eve and night — how spend my day ?
Tomorrow I must be Pippa who winds silk,
The whole year round, to earn just bread and milk :
But, this one day, I have leave to go,
110 And play out my fancy's fullest games ;
I may fancy all day — and it shall be so —
That I taste of pleasures, am called by the names
Of the Happiest in our Asolo !
See ! Up the hillside yonder, through the morning,
115 Some one shall love me , as the world calls love :
I am no less than Ottima, take warning !
The gardens, and the great stone house above,
And other house for shrubs, all glass in front,
Are mine ; where Sebald steals, as he is wont,
120 To court me, while old Luca yet reposes :
And therefore, till the shrub – house door uncloses,
I ... what now ? — give abundant cause for prate
About me — Ottima, I mean — of late,
Too bold, too confident she'll still face down
125 The spitefullest of talkers in our town.
How we talk in the little town below !
But love, love, love — there's better love, I know !
This foolish love was only day's first offer ;
I choose my next love to defy the scoffer :
130 For do not our Bride and Bridegroom sally
Out of Possagno church at noon ?
Their house looks over Orcana valley :
Why should not I be the bride as soon
As Ottima ? For I saw, beside,

135 Arrive last night that little bride —
Saw, if you call it seeing her, one flash
Of the pale snow – pure cheek and black bright tresses,
Blacker than all except the black eyelash ;
I wonder she contrives those lids no dresses !
140 — So strict was she, the veil
Should cover close her pale
Pure cheeks — a bride to look at and scarce touch,
Scarce touch, remember, Jules ! For are not such
Used to be tended, flowerlike, every feature,
145 As if one's breath would fray the lily of a creature ?
A soft and easy life these ladies lead :
Whiteness in us were wonderful indeed.
Oh, save that brow its virgin dimness,
Keep that foot its lady primness,
150 Let those ankles never swerve
From their exquisite reserve,
Yet have to trip along the streets like me,
All but naked to the knee !
How will she ever grant her Jules a bliss
155 So startling as her real first infant kiss ?
Oh, no — not envy, this!

——他のだれをあがめるというの？　この日，私は，自分の好きなものに何でもなれるのではないかしら？　今日は，何になったら嬉しいかな？

私の朝なのよ，正午よ，夕方よ，そして夜なの——どうやって私の一日を過ごそう ？

明日は，絹糸を巻くピッパに戻らなきゃならないわ，
一年中，ただパンとミルクを稼ぐためにね。
でも，この日だけは，休暇をもらって，
自分の空想ゲームをたっぷりとしに行けるの。
一日中，空想するかもしれないわ——そして，必ずそのようになるん

だわ――自分で，いろいろな楽しみを味わい，私たちのアソロで最も幸せな4人の名前で呼ばれるって！

見て！　向こうの丘の斜面の上方で，朝の間ずっと，自分をだれかに愛させるの，この世が愛と呼ぶように。

私，いやしくもオッチマよ，気をつけて！

庭という庭，その上の大きな石造りの家，正面が全部ガラスでできた，木を植えてあるもう一つの家は私のものなの。そこに，セバルドは慣れたもので忍んで来るの，

私に求婚するために，年寄りのルカがまだ眠っている間に。

それじゃ，温室のドアが開くまで，

私は……さて，どうするかって？――　私，つまりオッチマについて，うわさの種をたくさん与えてしまうのよね，最近。

あまりに大胆に，あまりに確信に満ちて，彼女ったら私たちの町の最も意地悪なおしゃべりどもを，平気で威圧するのよ。

なんて私たちって，下の小さな町でよくおしゃべりするんでしょう！

でも，愛，愛，愛――私は知ってるわ，もっといい愛があるってね！

このばかな愛は，一日の最初の申し出にすぎなかったのよ。

あざける人にいどむため，次の愛を選ぶわ。なぜって，私たちの花嫁と花婿は，正午に，ポサーニョ教会からお出ましになるんでしょ？

2人の家は，オルカナ谷を見渡してるのよ。

どうして私，オッチマであるくらいすみやかに花嫁であってはいけないの？　なぜって，私見たのよ，その上，小柄な花嫁が昨晩着くのを――

見たのよ，もしそれが，彼女を見たことだと言えるなら，色白で，雪のように汚れないほほと，黒くて明るい色の巻き毛が一度きらめくのを。

黒いまつ毛以外，どんなものより黒かったわ。

彼女，あのまぶたをおおい隠さないのかしら！

――それほど彼女，気丈だったわ。ベールは，彼女の色白で，汚れないほほの近くまでかかっていなければならないし――見るための花嫁で，やっとさわれるくらいなの。

さわるのがやっとなのよ，覚えておいて，ジュウル！　だって，そういう貴婦人方って，顔のどの部分でも花のように扱われることに慣れていて，まるで，人の息が吹きかかると散ってしまう百合の花のような弱い存在じゃないの？

こうした貴婦人方は，心地良くって楽な生活をしているのね。

私たちの中にだって，本当に昔は，素晴らしい純潔があったのに。

ああ，あのひたいには，乙女らしいかそけさを保って，

あの足には，貴婦人らしい貞淑を残して，あのくるぶしが，決して，その見事な慎しみからそれぬようにしてちょうだい。

でも，だからといって，私のように通りを軽快に歩かなきゃだめよ，

ひざまで，すべてあらわにしてね！

どうやって彼女，ジュウルがこの上ない喜びを手に入れるのを許すのかしら，

実際初めての幼な子のキスのように，はっと驚くような無上の幸福を？

ああ，いけない――うらやまないわ，このことは！

(註)

115行目　1841では“Love me as I love!”であった。この世が普通「愛」と呼ぶのは，「恋愛」のことである。“shall”に強い意志あり，116行の“no less than”は「他ならぬ」の意で，強調を示す。

121行目　温室のドアが開くのは，セバルドとの情事の後，彼を外へ出すため。

129行目　1841では，“Next love shall defy”だが，MSで“I choose……”にしたことで，本人の意志がさらに明確な形で入った。

131行目　“Possagno”は，Asoloから北へ約6マイル，そして少し西へ行った所にある町で，Alps山脈のふもとにある。

132行目　“Orcana valley”Asoloを出て北に向かい，一つの谷を越えて4マイルほど進むと，Orgagna valleyに入る。さらに北へ行き，別の谷を越すと，Possagnoの町がある。

134行目　“beside”＝besides

146―47行　MSで付加。147行目の“whiteness”は白さで，すなわち「純潔」。“us”とは，Pippaのような働く娘たちを指す。

— Not envy, sure ! — for if you gave me
Leave to take or to refuse,
In earnest, do you think I'd choose
That sort of new love to enslave me ?
Mine should have lapped me round from the beginning ;
As little fear of losing it as winning ;
Lovers grow cold, men learn to hate their wives,
And only parents' love can last our lives.
At eve the Son and Mother, gentle pair,
Commune inside our turret : what prevents
My being Luigi ? While that mossy lair
Of lizards through the winter – time is stirred
With each to each imparting sweet intents
For this new – year, as brooding bird to bird —
(For I observe of late, the evening walk
Of Luigi and his mother, always ends
Inside our ruined turret, where they talk,
Calmer than lovers, yet more kind than friends)
— Let me be cared about, kept out of harm,
And schemed for, safe in love as with a charm ;
Let me be Luigi ! If I only knew
What was my mother's face — my father, too !
Nay, if you come to that, best love of all
Is God's ; then why not have God's love befall
Myself as, in the palace by the Dome,
Monsignor ? —— who to – night will bless the home
Of his dead brother ; and God bless in turn
That heart which beats, those eyes which mildly burn
With love for all men ! I, to – night at least,
Would be that holy and beloved priest.

——ええ，うらやみませんとも！——だって，もしあなたが私に，受けるも拒むも許してくれたら，私が，自分を奴隷にするあのような新しい愛を選ぶと本気で思ってるの？

私の愛は，初めから私を包んでいたらよかったのに。それは，手に入れることも難しいかわりに，失う恐れもほとんどないの。

恋人たちって熱がさめるし，男は，妻を嫌うようになるものよ。

ただ，両親の愛だけよ，私たちを生き永らえさせてくれるのは。

夕方，優しい一組の息子と母親が，

私たちの小塔の内で，仲良く話をしてる。

私がルイジであって悪いというの？　冬の間ずっと，とかげたちのこけむしたあの穴が，騒がしくなってるわ，卵を抱く鳥たちのように，ルイジと母親がお互いに，この新年への楽しい思いを与え合うせいでね——

（なぜなら，最近気がついたんだけど，ルイジと母親の夕べの散歩は，私たちの廃虚となった小塔の内で終わるの。その場所で，彼らは話すのよ，恋人同志より静かに，それでいて，友達よりもっと優しく）

——その間，どうか私を気にかけてちょうだい。害から守り，策略をめぐらしてでも魔法を使うように愛に安らかでいさせてほしいの。

私をルイジにして！　自分の母の顔がどんなだったか知ってさえいたらなぁ——父の顔も！

いいえ，そこまで行けば，すべてのうちで最高の愛は神の愛よ。じゃ，神の愛が，大聖堂のそばの官邸にいる司教さまに下るように，私に降りかかったらおかしい？——司教さまは，今夜，亡くなった兄弟の家を祝福なさるわ。そして今度は神さまが，ドキドキするあの胸，すべての人への愛で穏やかに燃えるあの目を祝福されるのよ！　私，せめて今夜だけは，あの神聖で，最愛の司教になりたい。

(註)

161行目 “Mine” = My love「親子の愛」のこと。

163—64行 MS で付加。

165行目　この形になったのは MS でだが，“At eve the son and mother, gentle Pair” であった。1849年に “pair”，68年に “the Son and Mother”。1841年に，“…… when at eve the pair” であった所をみると，「母親と息子」という「親子の愛」への Pippa の強いあこがれが感じられる。

166行 “turret” Asolo の丘の頂上にある，ローマ後期の要塞の La Roca の

一番古い部分である塔。

167 — 68行 " that mossy lair of lizards" は，turret の状態を形容。

171 — 74行 MS で付加。

176行目 "schemed for" は，たとえ，魔法やまじないという手段を使っても。

179行目　1841年では，" the greatest love"。愛の形(質)を比較しながら考えると，行きつくところは。

181行目 " Dome" イタリアの大聖堂。duomo 。町の主教会。"palace" は，「宮殿」ではなく，司教の「官邸」。

183 — 85行 "and God ……" から "men : " までは， MS で付加。

186行目 "priest" は「司祭」。司祭の中から司教（bishop）が選ばれる。" Monsignor" は，「司教」の尊称。

Now wait ! —— even I already seem to share
In God's love : what does New – year's hymn declare ?

What other meaning do these verses bear ?

190 *All service ranks the same with God:*
If now, as formerly he trod
Paradise, his presence fills
Our earth, each only as God wills
Can work —— God's puppets, best and worst,
195 *Are we ; there is no last nor first.*

Say not " a small event ! " Why " small " ?
Costs it more pain that this, ye call
A " great event," should come to pass,
Than that ? Untwine me from the mass
200 *Of deeds which make up life, one deed*
Power shall fall short in or exceed !

And more of it, and more of it ! —— oh yes ——
I will pass each, and see their happiness,
And envy none —— being just as great, no doubt,
205 Useful to men, and dear to God, as they !
A pretty thing to care about

So mightily, this single holiday!
But let the sun shine! Wherefore repine?
—— With thee to lead me, O Day of mine,
210 Down the grass path grey with dew,
Under the pine – wood, blind with boughs,
Where the swallow never flew
Nor yet cicala dared carouse ——
No, dared carouse!

[*She enters the street.*]

ちょっと待って！—— 私ですら，すでに神さまの愛にあずかっているみたい。新年の讃美歌はなんて言ってるの？
これらの詩には，他にどんな意味があるっていうの？

すべての奉仕は，神には同じ価値がある。
もしも今，以前神が楽園を歩いたように，その存在が私たちの地を満たすなら，
各自は，ただ神が望むように働けるのだ —— 神にあやつられる人形だ，最良の人も，最悪の人も，私たちは。
後の者もなければ，初めの者もない。

「ささいな出来事！」と言うな。
なぜ，「ささい」なのだ？
あなた方が，「大きな出来事」と呼ぶものが起こるのに，もっと神の痛みが要るのか？
人生を形づくる数々の行為のしがらみから私を解き放ってくれ。神の力が不足するか，余っているかの一つの行為から！

そして，もっと，もっと神の愛を！—— ああ，そうだわ ——，
私は，それぞれの所を通って，その幸福を見るけど，だれをもうらやま

ないことにするの ―― 疑いもなく，その人たちと同じくらい私も偉大で，人の役に立ち，神に愛されているのだから！

たった一つのこの休日を，そんなに大げさに心にかけるなんて，大したことね！

でも，太陽は輝いてちょうだい！　なぜ，不平を言うの？

―― ああ，私の日さん，あなたが導いてくれるというのに，

露をしいて灰色になった芝生の道を下り，松の森の下へ，大枝でおおわれて見えない所，つばめも決して飛ぶことなく，

ましてや，せみもあえて鳴き騒がなかった ―― そう，あえて鳴き騒がなかった所へ！

[彼女は通りへ入る]

(註)

191行目　聖書の創世記3章8節参照。

194―95行　人間から見て，早く救われると思う人が，遅くなることがあるし，その逆もある。たとえば，金持ちは多く献金するから，一番早く救われるとはいえない。神の目は公平なのだ。(マタイ19：30，マルコ10：31，ルカ13：30参照)

199―201行 "small" や "great" は，どちらが大事ということはない。一つの行為は，神の力の過不足で「大小」が決まるが，神はどちらにも同じように痛み（労苦）を注がれる。人生は，一つ一つの行為が積み重なってかたまりとなり，人をがんじがらめにしてしまうのだが，神の愛は，そこから人を解放してくれるのだ。

202行目 "it" は "God's love"

203―4行　初版から大きく変わった箇所。1841 : So that my passing , and each happiness / I pass, will be alike important — prove / That true ! oh yes — the brother, / The bride, the lover, and the mother, — / Only to pass whom will remove — / Whom a mere look at half will cure / The Past, and help me to endure / The Coming …… I am just となっており，過去と，過去からの救済に言及し，自分がそばを通ることで，それぞれの人が相手を見つめて真理を悟り救われることをはっきり説明している。しかし，MS での変更の方が説明文くささがとれ，詩としてはすっきりする。

205行目 "Useful to men, and dear to God," は，MS で変えられたものだが，Pippa の心理を示すキーポイントと思われる。

（参考文献）
Selected Poems of Robert Browning With Introduction & Notes by Kenji Ishida and Rinshiro Ishikawa, 7th ed. (Tokyo : Kenkyusha, 1966)
A Browning Handbook William Clyde DeVane, 2nd ed. (New York : Appleton — Century — Crofts, 1955)
Browning Studies Vernon C. Harrington (Boston : Richard G. Badger, 1915)
An Introduction to the Study of Browning Arthur Symons, new ed. revised and enlarged (London : J. M. Dent & Sons, 1916)
The Life of Robert Browning W. Hall Griffin and H. C. Minchin, 3rd ed. (London : Methuen & Co., 1938)